

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

行方不明のジャーナリスト  
(変わるネパールと変わらぬネパール：  
グローバル化した世界に暮らす, 第9回)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード: 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5104">http://hdl.handle.net/10502/5104</a>



初来日時のブラディーブ氏(右)、左は貿易商のカンデル氏(2000年、大阪)

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『エスノ・サイエンス』(京大出版会 2002年)、『文化の生産』(ドメス出版 1999年)、『アジア読本ネパール』(河出書房新社 1997年)など。

## 変わるネパールと変わらぬネパール

### グローバル化した世界に暮らす

友人のジャーナリストが行方不明になっている。彼の名はブラディーブ・タバ・マガール氏。マガール民族運動の若手の運動家で、雑誌『ラファ(友人)』の編集長兼記者だ。ニューヨーク市立大学に留学していた彼から、再来日するため身元保証人になってくれ、とファックスが届いたのは二〇〇一年四月だった。私は喜んで書類を用意し、彼は東京に住むマガール人の友人宅に三か月滞在した。だが、帰米後、消息を絶った。八月、先の友人に彼から「ニューヨークの収容所にいる」という手紙が届いた。皆は、王制批判や親マオイスト(第八回参照)的な言動から彼は政治犯として国際手配され、米政府に逮捕されたのだと噂した。

真相が明らかになったのは、二〇〇二年の六月である。拘留中の彼を支援する米国のNGOから私にメールが届いたのだ。実は彼は、ネパールに帰国することに身の危険を感じ、自ら米国に亡命を申請していたのだ。九・一一事件をはさみ審理は長引いたが、結局、申請は受理されなかった。米国の支援者は、今度はカナダへの亡命申請を試みるので、三か月でよいから彼を日本で保護してほしいといってきた。おりし

## 行方不明のジャーナリスト

も同月、ネパールでは著名なジャーナリストのクリシュナ・セン氏が獄中で拷問死していた。私は「人権が侵害されることを憂慮しての一次的保護」として、旅行者査証の発給をニューヨークの日本領事館に願いつた。だが、これも却下されたようだ。次の連絡は意外な所からあった。九月五日、成田のコンチネンタル航空から電話があり、「彼を強制送還中だが、日本からネパールまでの渡航費を払ってほしい」といってきた。出さないとどうなるかと問うと、搭乗させたわが社の責任になるというので、そうしてもらった。社員は「彼が亡命することを知っていたか」と尋ね、そうであれば貴方も罰せられますよと理不尽な捨て台詞をはいた。

ネパールに戻った彼から、いつ連絡があるだろうと待ったが、ついにその日は来なかった。こうなると帰国と同時に、ネパール軍に連行された以外考えられない。マガール協会の会長が大臣に就任した(第五回参照)とき、私は大臣に搜索を依頼したが、不明のまま。残る手段は、家族の了解を得て人権団体に搜索願を出すことだ。マオイストの反乱にゆれるネパールは、ひどい人権侵害がまかり通っているのである。

第9回

国立民族学博物館助教授  
写真文 南真木人